

## 「問い」を深めながら

川端 博 (名古屋外国語大学出版会 編集主任)

「いま本当に苦しんでいる人の声を届けたい」

先日、企画会議で、ある教諭が言いました。

「でも、ソーシャルディスタンスとやらで、近づくことも会うこともできない人から、そんな真実の声を聞くことができるのでしょうか」

イギリスでは六人以上の会は禁止と決められたそうだ。ニュースを伝えたBBCのアナウンサーいわく「では本当に会いたい人は誰なのか、決めなくてはなりませんね」。

コロナ禍で、あらためてつきつけられる。そんな大事なことも考えずに、本を作っていたかもしれない。メールで著者とやりとりし、パソコンだけで編集、データ入稿。

完成した本は電子化され、オンライン書店で販売。著者の顔はもちろん、読者の顔も見えないままで。

だから伝わる言葉は肉声を欠き、ついでに重さも欠いていたのか。出版は言葉をあやつる仕事だが、言葉の本来の

力が、少しずつ失われてきていた気がした。

京都大学・前総長の山極寿一先生が、今の災厄に関して言われたこと。「大学人はその持てる知識を、今こそ普通の人に、普通の言葉で届けなければならぬ」

新型ウイルスという得体のしれない、目に見えない敵に脅えているのは、世界のすべての人たちだろう。よりよく生き抜き、考える手がかりを、必死になって求めている。大学の出版部も、応えることができるのではないか。

内外の思想家たちは、コロナ世界について解釈や分析を語り、出版しつづける。過去との比較、ポスト時代は云々。たしかに3・11直後に比べれば、人文系の言葉は届きやすい。この事態をどう捉え、どう考えるかの段階に入ってきたからだ。でも、いろいろな論考を読んでもなぜか虚しく、既成の言説を水平に並べかえているだけ、と感じてしまう。だいたいち分かりにくくて。密室でつむがれる知が、

本当に苦しんでいる人の胸に響くのか。

言葉がその背中に乗せる知識も軽くなった。クイズ番組が全盛で、知識の量が人間のランク付け、ひいては差別につながっているのにも気づかない。「知識」じたいがお手軽な消耗品、分断の道具にすらみえる。

本当に必要なのは、従来の考え方とは違う問いを重ね、わかりやすい真実の言葉を探していくことだと思ふ。

そんな「知」を届けるためには、自身も、企画会議でも、まず「問い」を垂直に深めていく作業が必要だろう。

安易ですが、「国境の経済学」という企画があるとする。これまでなら、国境はいつ誕生したか、国家単位の経済とは何か、アンチテーゼとしてのグローバル経済とは、等の顕在化している疑問を並べれば、目次が簡便にできた。

いま、問いの次元を、みんなの知恵を借りて垂直方向に変えてみる。国境をつくったのは誰なのだろう。なぜ彼らにその必要があったのか。国境をつくることで排除されたものとは何か。そして「そもそも境界線は本当に必要か」

「それは、人を(わたしを)幸せにするのか」

昔は評判の悪かった根源的な「そもそも論」が求められている。そもそも出版、編集って、なんなのさ？

こんなふうにして感性を研ぎ澄まし、迷いをぐるぐると重ねることで、運よく思考の深みに降りていくことができたら、いくつか「最後の問い」にたどり着くこともある。

いま死んでいいのか(それはイヤだなあ、もっと普通に死にたい。普通ってなに?)。ではお尋ねするが、いま生まれたらどうする?(人と二メートル離れなければならぬこの世界に? 人間がマスクで顔を隠す世界に?)

そんな問いかけの底からなんとか浮上してきたとき、付録として、思いきり妙なアイデアがくつついてきたりする。

ある編集者の夢に、こんな幻のタイトルが浮かんだ。

『遊牧都市国家論』……人との距離も自由で、執着しない……境界も国境もない、伸び縮みする都市、草を食む町、いつのまにか消えている道。明日はどこへ行くのかと考える人たちの世界……普通の言葉が普通の人に届くような。